

佛尊堂遺跡

1999年3月

笠岡市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、坪生携帯・自動車電話基地局建設事業に伴い、日本コムシス株式会社中国支店との覚書に基づいて、笠岡市教育委員会が発掘調査を実施した御尊堂遺跡の調査報告書である。
2. 御尊堂遺跡は、岡山県笠岡市入田字迫1626番地に所在する。
3. 発掘調査は、笠岡市教育委員会文化課職員安東康宏・岩崎仁司が担当して、平成8年6月から7月にかけて行った。
4. 本報告書の編集作成は、安東が笠岡市教育委員会文化課分室において行った。なお、遺物の整理・復元については関藤幹人、写真撮影と図の作成については三原富美子の協力を得た。
5. 本書で示した方位は、特に示さない限り磁北である。遺跡付近の磁北は西偏 $6^{\circ}40'$ を測る。
6. 本書の第2図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製・加筆・縮小したものである。
7. 出土遺物および図面・写真等は、笠岡市教育委員会文化課分室(笠岡市金浦50-3)に保管し、一部を笠岡市立郷土館(笠岡市笠岡5628-20)において展示公開している。
8. 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性があるものを示す。
9. 各蔵骨器には、取り上げ時の整理番号(第3・4図)と、報告書上の遺物番号(第6~10図)とがあり、表1において対比している。

目 次

例言

目次

第1章	遺跡周辺の歴史的環境	1
第2章	発掘調査の経緯と経過	3
第3章	発掘調査の概要	
第1節	調査区の概要	4
第2節	火葬藏骨器	8
第3節	土器棺墓	18
第4節	五輪塔	22
第4章	まとめ	23

図表目次

第1図	笠岡市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50000)	2
第3図	調査区北側の藏骨器集中部 (1/40)	4
第4図	調査区平面図 (1/70)	5
第5図	調査区断面図 (1/100)	7
第6図	遺物実測図 (藏骨器①) (1/4)	11
第7図	遺物実測図 (藏骨器②) (1/4)	12
第8図	遺物実測図 (藏骨器③) (1/4)	13
第9図	遺物実測図 (藏骨器④) (1/4)	14
第10図	遺物実測図 (藏骨器⑤ 他) (1/4)	15
表1	火葬藏骨器一覧表	16
第11図	土器棺墓群 (1/40)	18
第12図	遺物実測図 (土器棺) (1/8)	20
第13図	遺物実測図 (副葬品) (1/2)	21
表2	土器棺内出土銭貨一覧表	21
第14図	遺物実測図 (五輪塔) (1/8)	22
第15図	伝西光寺跡周辺図 (1/5000)	24

図版目次

図版 1 -1.	御尊堂遠景 (西側中坊から)	
-2.	調査区西半 (南から)	
-3.	調査区東半 (南西から)	
図版 2 -1.	釜7、釜5、 釜6、鉢1、 釜4、釜3出土状況 (北東から)	
-2.	壺1、甕3、 釜2、甕2、釜1出土状況 (西から)	
-3.	甕4、甕5、 釜8、釜9、 鉢2、釜12出土状況 (南から)	
図版 3 -1.	甕2の石囲い (西から)	
-2.	甕3出土状況 (東から)	
-3.	甕7出土状況 (西から)	
-4.	甕13出土状況 (南東から)	
-5.	甕14出土状況 (南から)	
-6.	釜4出土状況 (北東から)	
-7.	釜7、釜5出土状況 (北東から)	
-8.	釜14出土状況 (西から)	
図版 4 -1.	釜19出土状況 (東から)	
-2.	釜20、釜7出土状況 (南東から)	
-3.	鉢4の平瓦出土状況 (南西から)	
-4.	調査区北端部五輪塔出土状況 (西から)	
-5.	土器棺墓群 (南西から)	
-6.	土器棺1出土状況 (西から)	
-7.	土器棺2出土状況 (南から)	
-8.	土器棺3出土状況 (西から)	
図版 5	藏骨器①	
図版 6	藏骨器②	
図版 7	藏骨器③	
図版 8	土器棺墓・五輪塔	

第1章 遺跡周辺の歴史的環境

御尊堂遺跡は岡山県笠岡市入田字迫1626番地に所在し、御尊堂と呼ばれる山の頂上部分にある。

笠岡市は岡山県の南西端に位置しており、現在人口約61000人、面積約136km²で、西は広島県、南は海上で香川県に接している。

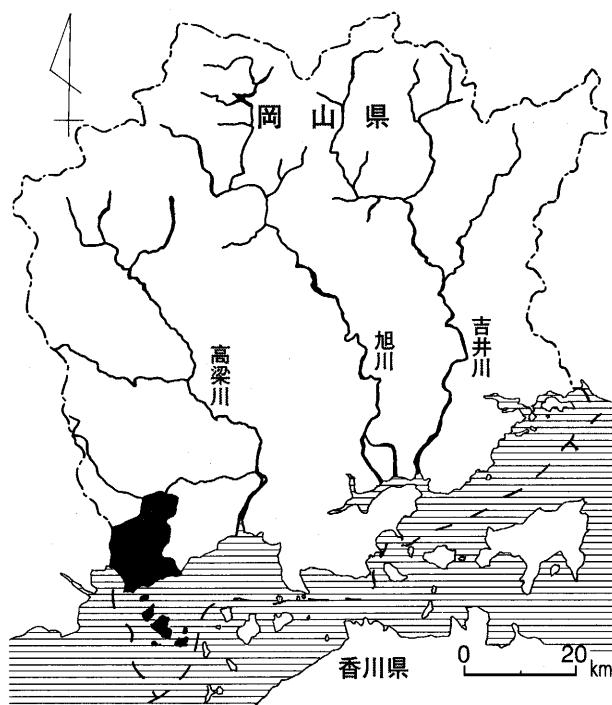
笠岡市域において発掘調査された中世の遺跡には、山陽自動車道の建設に伴って調査が実施された本谷遺跡(1)・園井土井遺跡(2)・鍛治屋遺跡(3)などがある。本谷遺跡では集落跡と墓地、園井土井遺跡では堀や柵によって区画された館跡、鍛治屋遺跡では製鉄関連遺物を出土する集落などが検出されている。また、市内各所には山城が数多く築城されているが、その城主は中世前半の真鍋氏・陶山氏から戦国期の小田氏・村上氏等と様々である。

御尊堂遺跡は、伝西光寺跡の一部と言われているため、ここでは伝西光寺跡も含めて地理的・歴史的環境を確認しておきたい。伝西光寺跡は、岡山県笠岡市入田と井原市上稻木町との境界線上に位置する。このあたりは笠岡市の中でも西端部に位置しており、周辺は、小高い山に囲まれた谷のような地形のなかで集落が展開している。付近には広い平地部はないが、笠岡市東大戸・小平井などの市内中部地域から西の広島県福山市・神辺町へと通じる東西往来がある。さらに、この東西往来から別れ、北の井原市へと抜ける南北道もあり、このあたりが、ちょうど笠岡市と福山市・神辺町・井原市方面を結ぶ交通の結節点になっていることがわかる。

その入田地区の周辺では古墳時代以後の遺跡が確認されている。(4)押撫地区にある押撫御塚古墳は前方後円墳と伝えられるが、墳丘の形状ははっきりしておらず、詳細は未だ不明である。その他の古墳としては、入田古墳・裸塚古墳などの小古墳がある。また、蛸村遺跡・時末遺跡は鉄滓が採集され、製鉄遺跡であると考えられている。篠坂にあるきょうぐろ遺跡は、人頭大の岩石を積んで小丘をなしたもので、経塚といわれている。さらに、有田の太折には、^{ふとおれ}須恵器を焼成した窯跡も知られている。

中世の遺跡としては、城跡が目立っている。御尊堂の北西2.3kmにある陶山氏の匠ガ城跡、西南西1.5kmにあり城関山と呼ばれる橋氏の仮名沢城跡、南1.8kmにある小見山氏の入田城跡、南2.8kmにある陶山氏配下の有田城跡などである。これらの城跡の存在は、当地が備中と備後の国境であると同時に、交通の要衝であったことを物語っている。御尊堂の南西1km弱には、泉福寺十二坊跡がある。入田・上稻木周辺を檀家とする西光寺に対して、篠坂周辺を檀家としていた寺のようである。

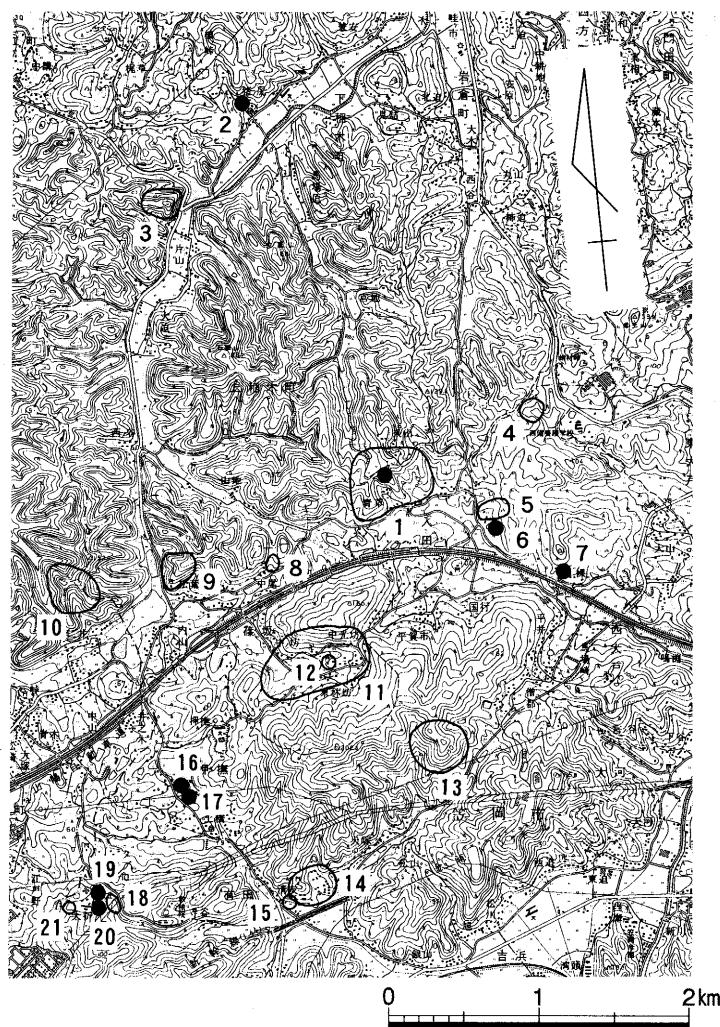
ところで伝西光寺跡は、山麓の各坊をはじめとして、山頂にまでその施設が展開していたことが今も残る伝承・地名等により



第1図 笠岡市位置図

伺われるが、特に御尊堂遺跡は見晴らしのよい丘陵の頂上に位置し、前述の東西往来はもとより、遠方まで広く見渡せる場所にある。地元では、御尊堂の名のとおり、ここに寺の施設があったとの伝説が伝えられていた。遺跡の近くに住む古老によると、昭和初期までは御尊堂の山頂には木が生えておらず、地表には五輪塔の1部も散見されていたという。当時すでに山頂から古い壺や甕が出土するという話は有名で、近所の者から遠来の骨董屋まで、様々な者がやって来て盗掘を行ったという。現在では、御尊堂山頂は完全に雑木林となっており、人も寄り付き難い状況となっていた。

ちなみに現在の西光寺は井原市下稻木町にある。しかし現在でも、伝西光寺跡周辺の集落は、西光寺の檀家とされている。



1. 伝西光寺跡(御尊堂遺跡) 2. 現在の西光寺 3. 匠ガ城跡 4. 蛴村遺跡
5. 時末遺跡 6. 入田古墳 7. 裸塚古墳 8. 篠坂遺跡 9. 仮名沢城跡
10. 仁井城跡 11. 泉福寺十二坊跡 12. きょうぐろ遺跡 13. 入田城跡
14. 有田城跡 15. 有田貝塚 16. 二塚古墳 17. 押撫御塚古墳 18. 太折窯跡
19. 太折1号墳 20. 太折2号墳 21. 太折散布地

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

註

- (1) 綱本善光・岩崎仁司「山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』1 建設省岡山国道工事事務所・笠岡市教育委員会 1987年
- (2) 福田正継「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (3) 岡田博・福田正継・松本和男「鍛冶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (4) 「原始編」『笠岡市史』第1巻 1983年

第2章 発掘調査の経緯と経過

「御尊堂」と呼ばれる山は、地元の入田・篠坂地区では、古くから西光寺跡の一部と伝えられており、土器や瓦等が出土する場所として認識されていた。

平成7年、地元在住の方から情報を得た笠岡市教育委員会は、翌平成8年1月9日、地元の佐藤一士氏の案内で御尊堂の現地踏査を行い、「伝西光寺跡」の存在を確認することとなった。伝承では御尊堂の山頂は、西光寺の鐘楼があった場所と言わっていたそうである。

平成8年の春、NTT中国移動通信網株式会社において坪生自動車電話・携帯電話基地局の建設が計画され、その候補地として御尊堂（笠岡市）と中坊（井原市）が上げられた。この2カ所はどちらも伝西光寺跡の一部であり、事前の調査を必要としていた。協議の結果、御尊堂への建設が決定した。施設の内容は、鉄塔・収容函と、それに至る道路である。

笠岡市教育委員会は、6月10日～12日にかけて御尊堂山頂の確認調査を実施した。調査では、山頂平坦部のなかで雑木の少ない部分に10×2mのトレンチを1本設定して掘り下げたところ、表土を剥いだ時点で蔵骨器が8点出土し、ここが中世の墓地として利用されていたことが判明した。

この結果を受けて再び協議が行われ、開発予定地の本発掘調査（全面調査）が行われることとなった。本発掘調査は、6月27日～7月24日にかけて行われた。調査面積は約300m²である。その結果、調査区全体から多数の蔵骨器等が出土して、山頂の中世墓地全体の様子が明らかとなった。

なお、各々の調査は、基地局建設事業を担当する日本コムシス株式会社中国支店と笠岡市教育委員会が覚書を締結し、これに基づいて行われたものである。

発掘調査の実施にあたっては、事業担当である日本コムシス株式会社中国支店、齊藤証夫氏と、丸紅建設株式会社広島支店、横田利久氏に、多大なご協力・ご援助を賜った。

また、調査の実施及び整理にあたっては、下記の方々から有益なご教示・ご助言をいただくとともに、暖かいご支援をいただいた。記して謝意を表す次第である。

河田嘉夫 佐藤一士 惣津章雄 高田知樹

発掘調査作業に従事していただいた下記の作業員の方々には、遠隔地からの通勤を強いた方々もあり、真夏日の中で、連日の重労働をしていただいた。ここに合わせて感謝の意を表したい。

倉橋正太 小坂義夫 小寺美知子 古田哲夫 古田豊子

三宅千代子 元家智代子 森ミツエ

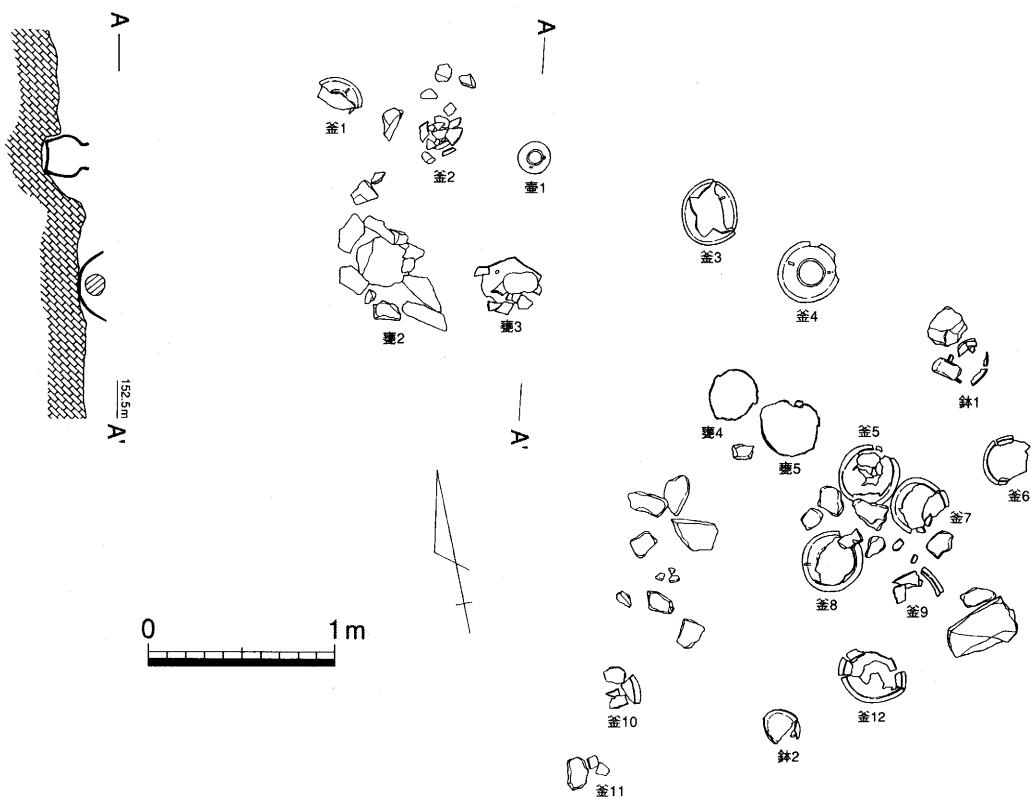
第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

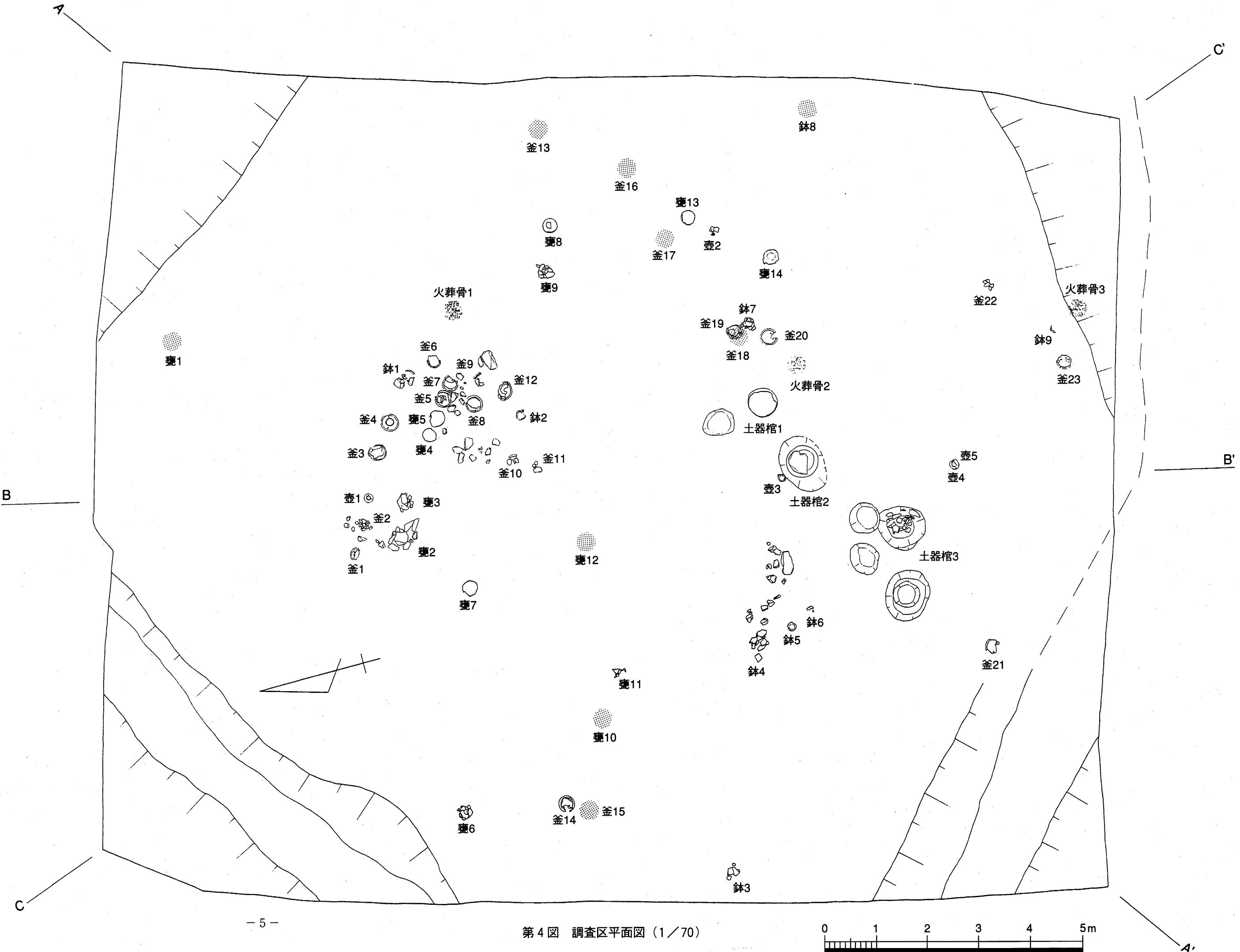
地表に堆積する腐葉土を除去し、表土を剥いだ時点で、調査区全体から多数の蔵骨器が検出された。これらは山頂の土砂が年月とともに流出したため、しだいにむき出しとなつていったのであろう。地元ではこの山を「御尊堂」と呼称し、鐘楼の跡とも言われてきたため、何らかの建物跡等の遺構を想定していたが、予想に反して全く検出されず、丘陵頂部全体が墓地として使用されていたことが判明した。今回の調査区は、南北約20m、東西約16m、面積約300m²であり、丘陵頂部の平坦面の大部分が収まっている。

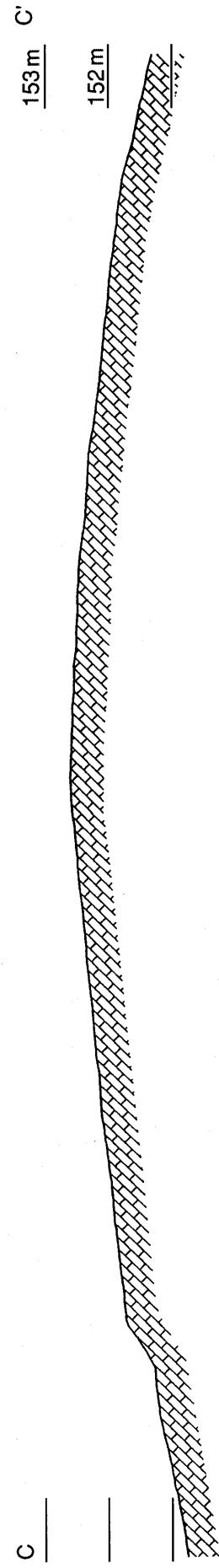
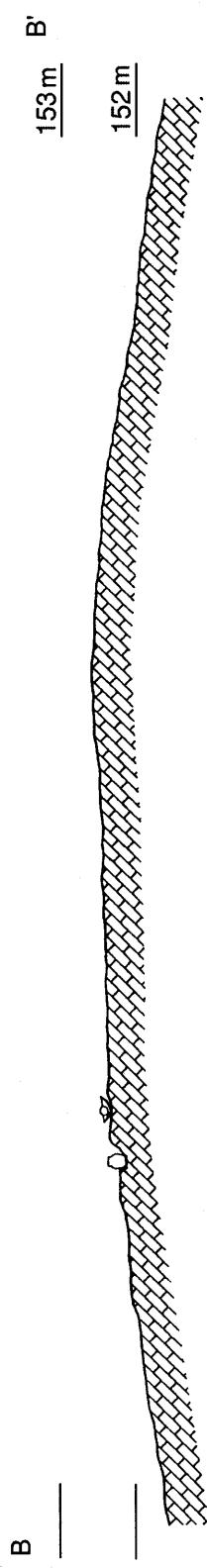
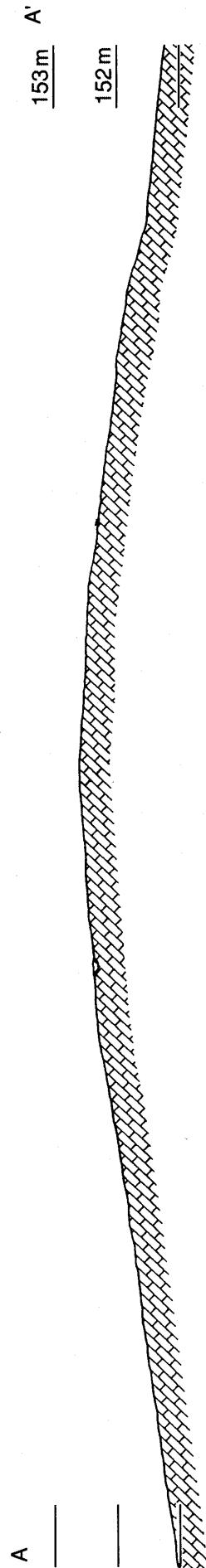
調査前から、丘陵頂部の周囲を幅1~1.5mの道状平坦面が取り巻いていることが知られていた。特に西側では残りがよく、円弧を描いて頂部を取り囲んでいるように見える。調査区内でもその一部が検出されたが、この道は墓地への参道の役割を果たしていたものと推察される。したがって、頂上の墓地部分は、この道と斜面に囲まれた300m²程度の範囲に営まれていたものと考えられる。

蔵骨器の配置に目をやると、まず、調査区中央の最も高い部分には、蔵骨器がないという特徴があり、あるいはこの位置に総供養塔などの特別な役割を担った施設が存在していたことも想定される。調査区北側では、蔵骨器が中央よりに集中しているのに対して、南側ではそういった傾向は見られず、分散して配置されている。全体に、亀山焼の甕がやや北よりに、土師質~瓦質の鉢がやや南よりに分布しているが、意図的なものかどうかはわからない。土器棺墓は調査区南側で一列に並ぶように配列されており、一定の規則性が伺える。



第3図 調査区北側の蔵骨器集中部 (1/40)





0 1 2 3m

A scale bar with markings at 0, 1, 2, and 3 meters.

第5図 調査区断面図 (1/100)

第2節 火葬蔵骨器

蔵骨器は、調査区全体に分布している。蔵骨器として使用されていたのは備前焼の壺8点以上・亀山焼の甕14点以上・土師質～瓦質の鉢10点以上・土師質～瓦質の羽釜23点以上である。蔵骨器は、地山を掘り窪めて据え付けているが、その上を覆っていた土は長い年月の間に流失してしまったものが多い。そのため大部分の蔵骨器が口縁部や肩部が内部に落ち込んだり、粉々の破片となった状態で出土している。完形の状態で出土したのは壺1(1)と釜4(32)の2点のみである。割れている蔵骨器であっても、原位置を保つものにはすべて、内部に火葬骨の小片が残存していた。

これらの蔵骨器の中で底部に穿孔が確認される個体は、1・6・9・10・11・13・19・28・33・34・35・41の12点である。特に9と10では複数の穿孔がみられる。逆に穿孔がなかったことが確認できるものは、5・18・24・31・32・38の6点である。

蔵骨器の大部分は単独で存在したが、一部に集石や平瓦との関連を伺わせるものもあった。

その他に、30cm四方の狭い範囲に火葬骨が集中して出土する地点が3箇所あった。火葬骨を直接埋葬したか、木製や布製の蔵骨器を使用していた可能性がある。

1～8は、備前焼の壺である。（第6図）

備前焼の壺は8点以上出土した。なかでも、1は完形の状態で出土しており、器高19.3cmを測る。3・6・7は須恵質を呈している。また、7は口縁部の破片から、雀口を有する壺であることがわかる。

これらのなかで、6は内外面とも青灰色の焼き上がりを示し、肩が張った器形であることから、間壁編年のⅢ期に、1は口縁端部を玉縁に作っており、底部が大きく胴の短い特徴があり、間壁編年のⅣ期に比定されるものと思われる。その他のものも含めて、備前焼の壺はおおむね間壁編年Ⅲ～Ⅳ期の製品ととらえてよいであろう。

9～19は、亀山焼の甕である。（第6・7図）

すべての個体で体部外面には格子目タタキ、内面には同心円当て具痕やハケメが残っている。9は、台石の周囲に角礫を配した石囲いの中から、破片の状態で出土した。集石墓として確認できる唯一の例である。底部には、径6mmの円孔を3ヵ所に穿っている。10は、内部に空風輪(87)が落ち込んだ状態で出土した。底部の四隅と中央に1ヵ所ずつ、計5ヵ所に穿穴が施されている。13は口縁全体が外方へ曲げられ、やや水平方向に伸びている。18は唯一図上で全形を復元できる甕である。これも内部に空風輪(85)が落ち込んだ状態で出土している。平底で底径17.8cm。体部内面は薄く浅い斜めハケメ調整である。当遺跡中で、この個体以外の甕は、すべて丸底である。19では、頸部外面に粗い縦ハケメが残る。その他、図化していないが、甕11は、後世に犬を埋葬するために掘られた土壤に破壊されて粉々になっていた。

これらの甕のなかで、最も古い様相を呈するのは18である。平底で、体部中央に最大径があり、口縁部は厚く、短く屈曲することなどから、亀山遺跡第3段階(13世紀後半～14世紀初頭)に位置付けられるものと思われる。9・17では、頸部の「く」字状の外反は保たれているが、口縁が若干拡張気味であり、頸部から口縁部にかけて外面にハケメが施されている点、丸底である点などは新しい要素である。亀山遺跡第4段階(14世紀前半～中葉)、大村遺跡ではⅢ期前葉とされているものに近い。残る甕の多くは、頸

部が「S」字状にゆるやかに湾曲しているもので、大村遺跡ではIV～V期(～16世紀代)とされているものである。口縁部が上下に拡張するもの(10・15・19)と、ぶ厚い口縁部がそのまま斜め上方に伸びるもの(11・14・16)とがある。その中で、赤茶褐色の土師質に近い焼き上がりを示す14、頸部外面に施されるハケメが粗大化している19などは特に新しい要素を持っている。

20～29は、土師質～瓦質土器の鉢である。(第8図)

22と23の鉢はいずれも小破片であるが、平瓦に近接して出土している点が注目される。特に23の下側からは、大小6点の平瓦片が半ば重なりあうように出土しており、これらの瓦が蔵骨器を置く台や蓋などに利用された可能性も考えられる。草戸千軒町遺跡では、煮沸容器としての使用痕を残す鉢が多く確認されているが、当遺跡出土の鉢には、使用痕を確認できるものはない。ほとんどの個体に共通して、外面には粗い縦ハケメ、内面には横ハケメ調整を施している。

これらの鉢を比較すると、24→28→20への変化が見て取れる。24では口縁部の拡張はみられず、口縁端部に面を持つのに対して、28ではやや外方に拡張気味の口縁となる。さらに20では口縁部内外への拡張が大きくなり、外方では下側への折り曲げに近い状況となる。焼き上がりも、24と28では褐色系で土師質の色調を呈するが、20においては灰色で瓦質というべき色調である。また、20はやや薄手であることも特徴の一つである。

これらの鉢の年代であるが、本遺跡の南西13km弱のところにある草戸千軒町遺跡では、SD760、SD4445・4446、SE4720などから類似する鉢が出土している。これらはほとんどが口縁端部が拡張されたものであるが、いずれも草戸IV期後半(15世紀末～16世紀初頭)に位置付けられている。岡山県内では百間川米田遺跡溝122下層から、口縁端部の拡張が弱い個体が出土しているが、こちらはおおむね15世紀代に属していると思われる。このことから、本遺跡の鉢についても、これを相前後する時期、およそ15世紀～16世紀前半頃があてられよう。

30～41は、土師質～瓦質土器の羽釜である。(第9・10図)

ほとんどの個体に煤が付着していることから、煮沸容器を蔵骨器として転用したものが多いことが伺える。各個体は、おおむね外面上半がハケメ後ナデ調整、下半が縦ハケメ調整、内面が横ハケメ調整であり、その多くが一つの個体の中で粗いハケメ・細かいハケメ・微細なハケメを使い分けている。これらの羽釜は、成形時には分割して作成した上半と下半を、鍔のあたりで接合して作られている。ほとんどの個体では、接合後内面に横ハケメを施して接合痕を消そうとしているが、34では接合後のハケメ調整を行っていない。また、33と40の接合部内面はナデ調整を行っている。39と40では、胴部と底部の境界が明瞭に区分でき、やや平底気味となるのに対して、30・35・41では境界が不明瞭で、より丸底に近い底部である。

31は、ほとんど完形に復元できる個体である。完全に黒色の瓦質土器であり、他の羽釜と若干異なる様相を呈している。横幅が広く、底部の器厚が薄い。内面はハケメというよりヘラ状工具で丁寧なナデ調整を行っている。出土時には、内部に口縁部破片とともに13cm角の平瓦片が落ち込んでおり、これを蓋として利用していたものと思われる。32は、検出時には40cm×20cmの長方形の蓋石が口を塞いでおり、ほぼ完形の状態を保っていた。煮沸容器としての使用時に、片方の釣手が折れたため、つるを付けるための円孔を2ヵ所に開けて使用していたようである。36の内部からは、結晶質石灰岩の小片が出土している。

38は、水平ではなく傾いた状態で出土したが、ほとんど完形に復元できることから、元来傾いたままで埋納されたものと思われる。内部には空風輪(84)が落ち込んでいた。

このように体部に鍔を持ち、口縁部を直立させる羽釜の時期について、草戸千軒町遺跡では、草戸IV期前半(15世紀後半)から出現し、IV期後半(15世紀末~16世紀初頭)に出土量が増加すると考えられている。岡山県内においても、津寺遺跡溝9・11・12・14や園井土井遺跡など、おおむね15世紀以降において多く認められる器種である。したがって本遺跡でも、これらの羽釜の年代は、おおむね15世紀以降のものと考えたい。

その他の遺物として、蔵骨器の蓋や台などに使用されていたと思われる平瓦、蔵骨器周辺から出土した土師質の椀や小皿などがある。(第10図)

42は、亀山焼の16とともに出土した軒平瓦片である。蔵骨器の蓋として使用されていた可能性がある。中心飾は立体的な宝珠で、短い唐草文が展開する。

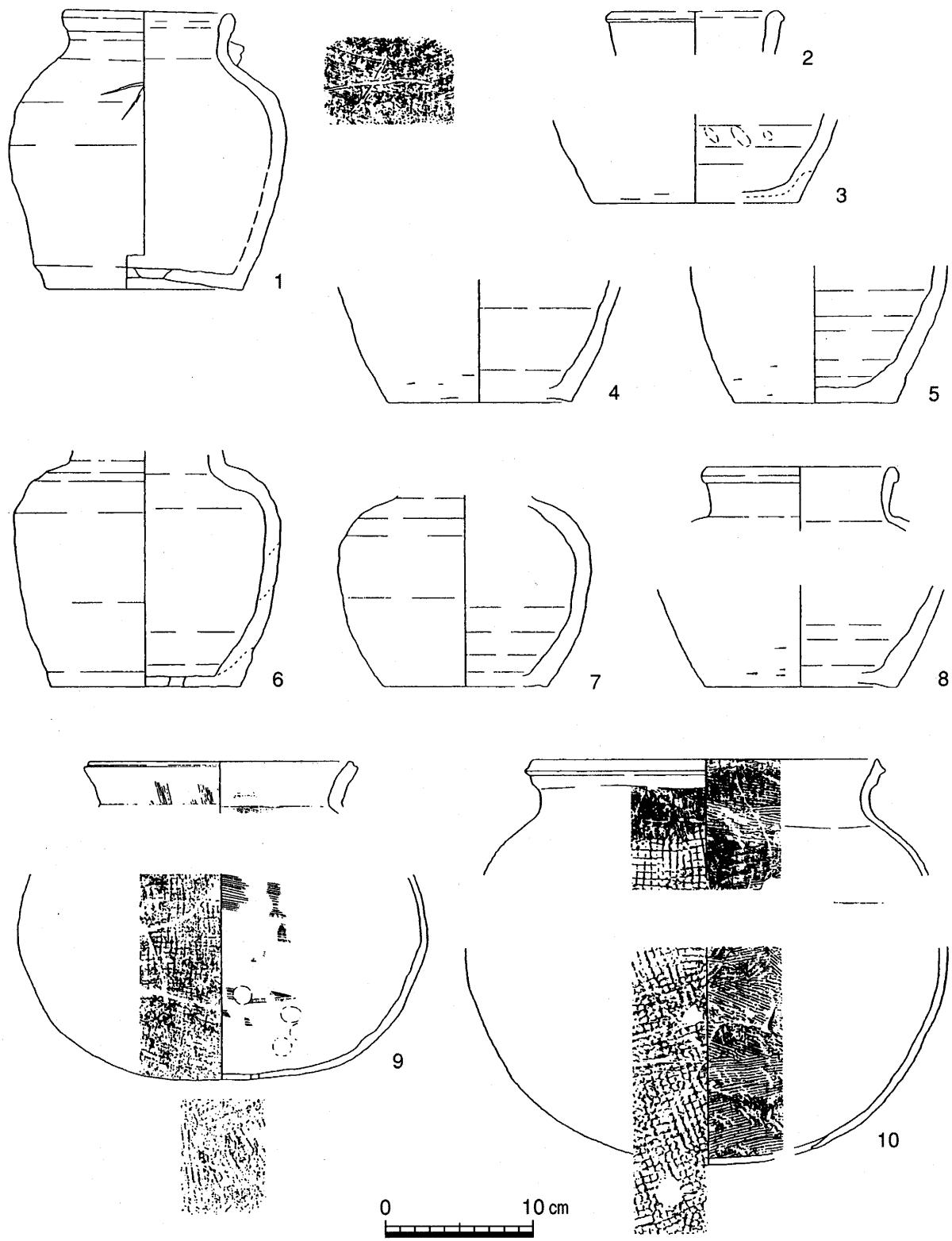
43は、亀山焼の17とともに出土した土師質椀である。このように、本遺跡では、蔵骨器の破片に混じって土師質の椀や皿の破片が出土しているケースがあるが、椀や皿はいずれも細片であり、各蔵骨器と直接関係があるものかどうかは断言できない。

44は、亀山焼の9とともに出土した土師質皿である。45は、上層の流土中より出土した土師質皿である。どちらも口縁部から底部まで全体がゆるやかに湾曲し、口縁端部がわずかに内湾する器形であると思われる。園井土井遺跡で、類似する皿が多数出土している。

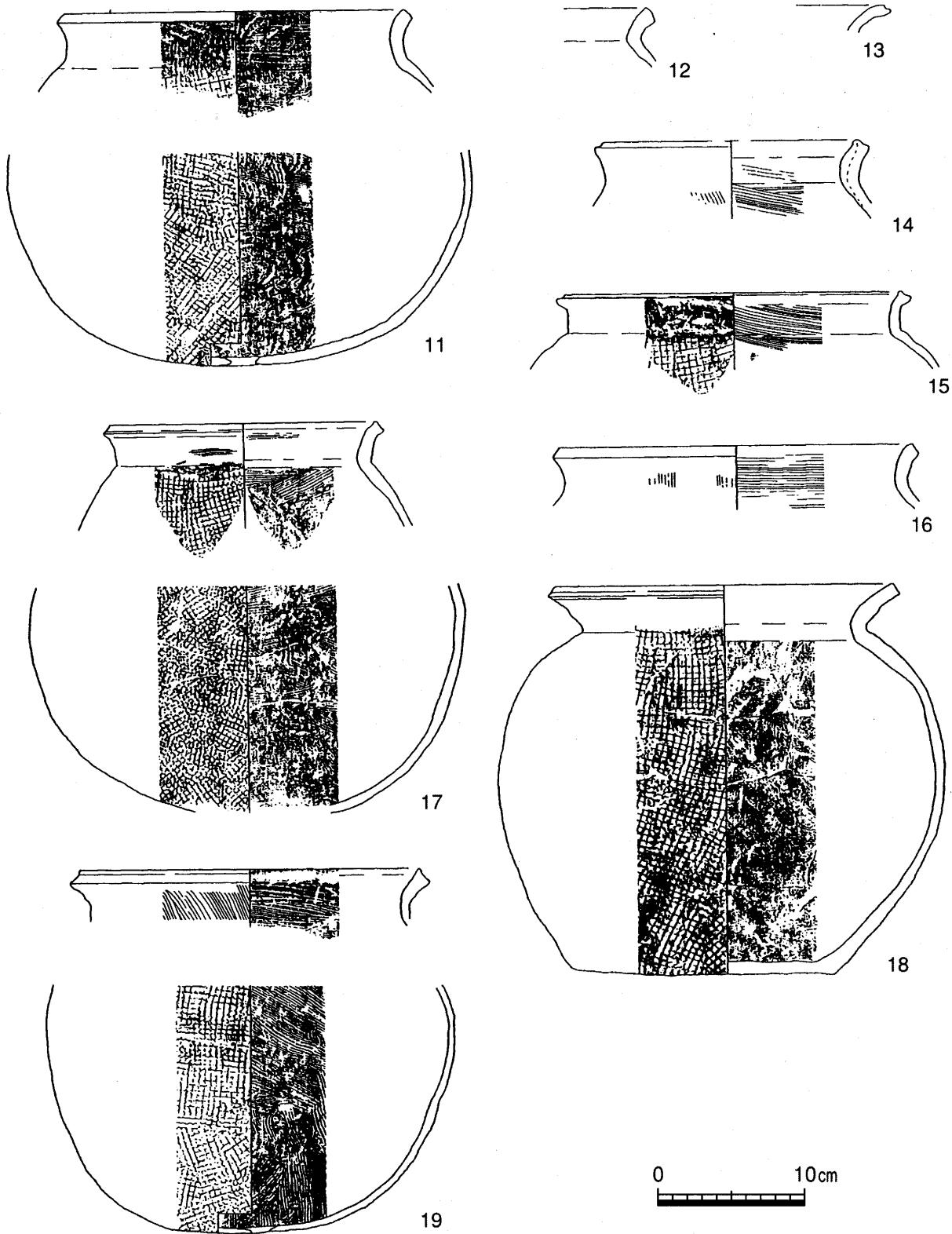
46は、調査区中央北端付近から出土した瓦質土器の擂鉢である。4分の1程度の破片であり、これが蔵骨器として使用されていたものかどうかは不明である。口縁端部が拡張されており、体部外面には粗いハケメ調整を施している。色調は黄灰色で土師質に近い。15世紀代に属すると思われる。

参考文献

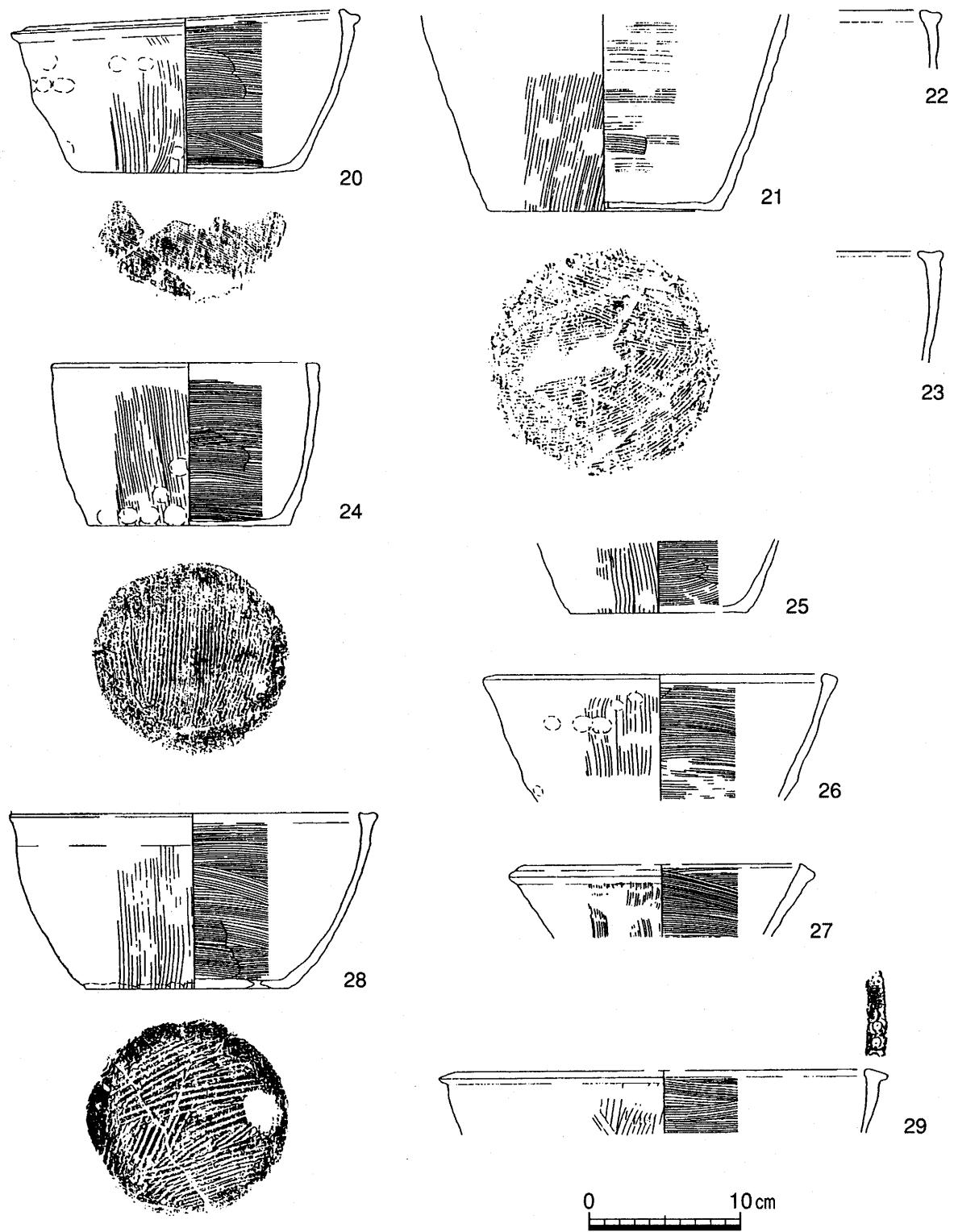
- 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60 1991年
岡田博「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年
篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』 1987年
江見正己・柴田英樹ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113 1996年
草原孝典『すく毛山遺跡』 1998年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II-北部地域南半部の調査- 1994年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』IV-南部地域南半部の調査- 1995年
鋤柄俊夫「中世食器の地域性 山陽」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997年
鈴木康之「中世食器の地域性 草戸千軒」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997年
岡本寛久ほか「百間川米田遺跡」3 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年
正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年



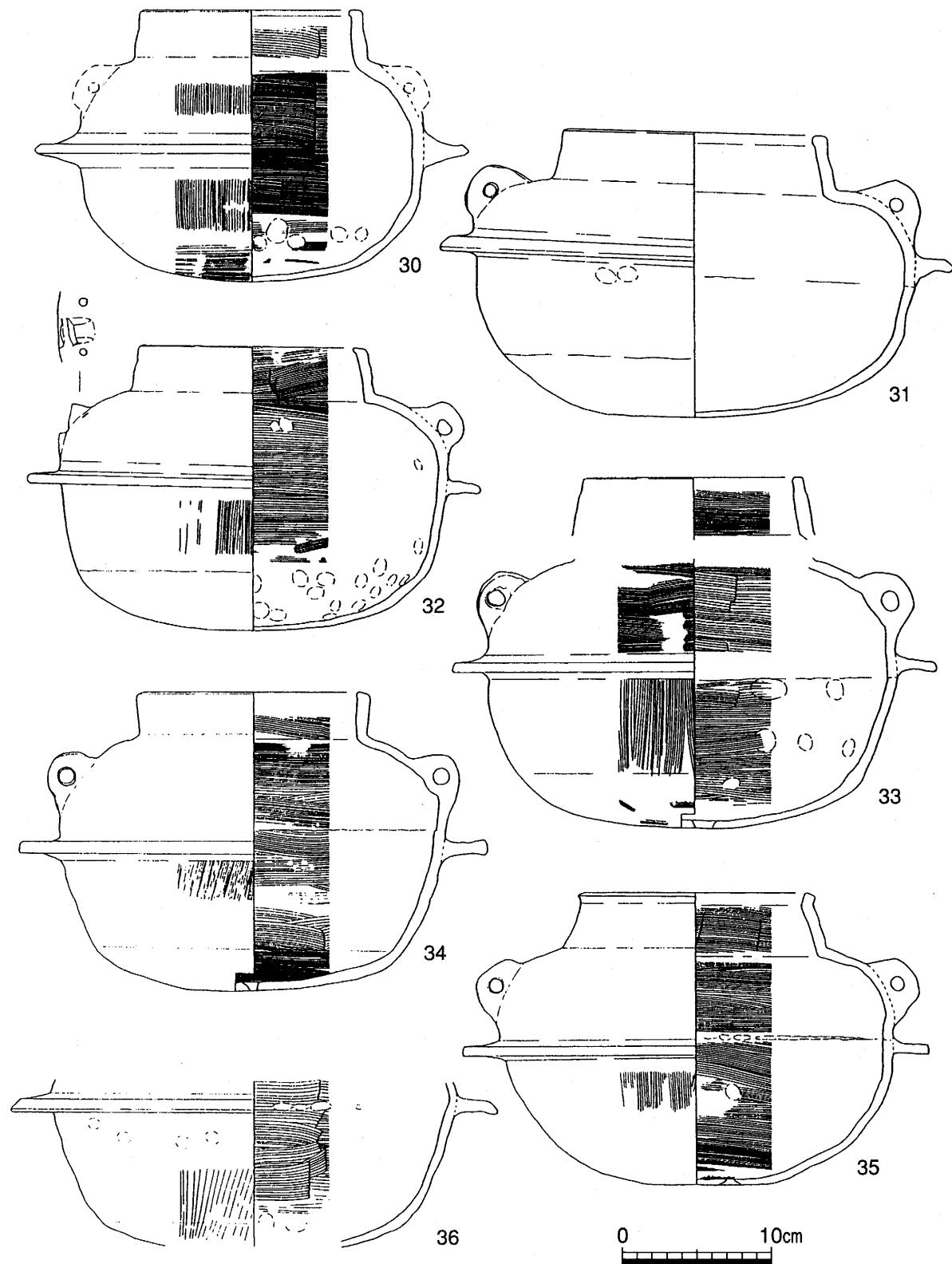
第6図 遺物実測図（藏骨器①）（1／4）



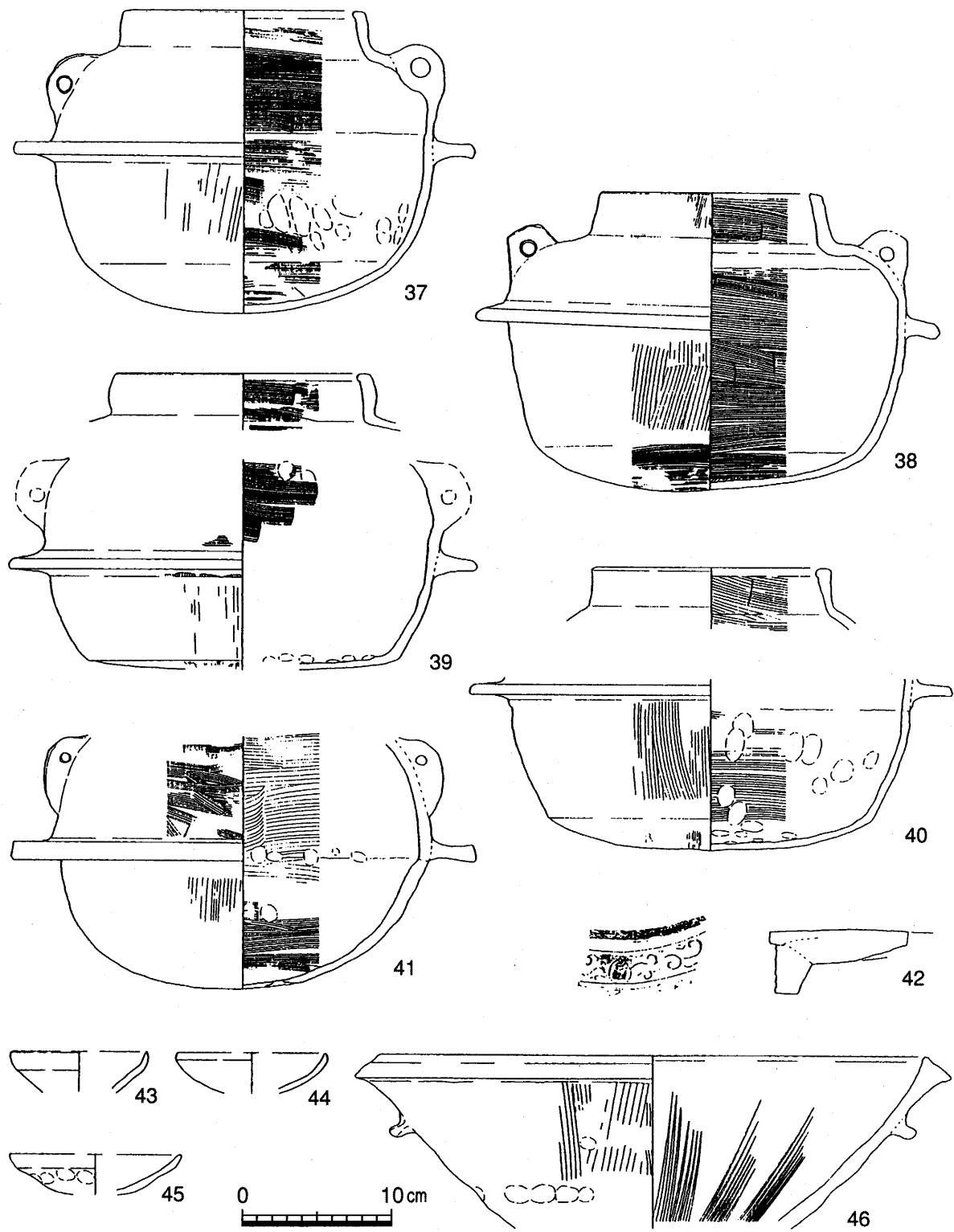
第7図 遺物実測図（藏骨器②）（1／4）



第8図 遺物実測図（藏骨器③）（1／4）



第9図 遺物実測図（藏骨器④）（1／4）



第10図 遺物実測図（埋骨器⑤他）（1／4）

表1 火葬蔵骨器一覧

1. 壺

番号	遺物番号	遺構・遺存状態	原位置	遺物の特徴					備考
				口径	胴最大径	底径	胎土	色調(外/内)	
壺1	1	完形	○	11.0	18.7	13.2	粗砂(細礫含)	光沢ある赤茶褐色	器高19.3cm
壺2	2	複数個体の破片が集中	×	(11.2)			粗砂	光沢ある赤茶褐色	
	3					13.9	粗砂(微礫含)	淡青灰色	
	4					12.4	粗砂(細礫含)	赤茶褐/濃青灰色	
壺3	5	胴下半のみ	△			10.8	粗砂(細礫含)	赤白~赤紫/紫~明紫色	
壺4	6	肩部以下残存	○		18.0	12.9	粗砂(細礫含)	濃青灰色	
壺5	7	須恵質の肩部以下	×		(17.0)	11.0	粗砂(細礫含)	暗青灰/赤茶褐~青灰色	雀口あり
壺6	8	包含層出土	×	12.6		13.0	粗砂(細礫含)	光沢ある赤茶/濃青灰色	

2. 壺

番号	遺物番号	遺構・遺存状態	原位置	遺物の特徴					備考
				口径	胴最大径	底径	胎土	色調(外/内)	
壺1	12	丸底の底部残存	○				粗砂(砂粒多)	淡褐色	劣化が著しい
壺2	9	集石中から破片を回収	△	17.8	(27.7)		細砂	白茶褐色	土師質皿小片伴う
壺3	10	底部残存・中に空風輪	○	23.3			細砂(黒色粒多)	濃青灰色	
壺4	13	丸底の底部残存	○				粗砂	暗青灰/濃褐色	底部穿孔
壺5	11	胴部下半残存	○	23.3	31.7		細砂(黒色粒多)	淡青灰/灰褐色	
壺6		丸底底部割れて残存	○				細砂	淡青灰色	平瓦・土師質椀小片
壺7	17	胴部下半残存	○	18.6	29.8		細砂(黒色粒多)	青灰褐/淡褐色	土師質椀小片伴う
壺8	14	丸底の底部残存	○	17.6			細砂	赤茶褐色	
壺9		丸底底部割れて残存	○				細砂	青灰褐色	
壺10	15	破片が集中	×	23.0			細砂	青灰褐色	
壺11		犬骨埋葬で壊され破片に	△				細砂	淡青灰色~淡灰色	土師質椀伴う
壺12	16	口縁破片を回収したのみ	×	25.0			細砂	淡暗灰/灰色	平瓦・軒平瓦が近接
壺13	19	胴部下半残存	○	23.2	28.0		細砂	灰色	
壺14	18	胴下半残存・中に空風輪	○	23.0	30.6	17.8	粗砂(砂粒多)	青い青灰色	器高27.4cm

3. 鉢

番号	遺物番号	遺構・遺存状態	原位置	遺物の特徴					備考
				口径	底径	器高	胎土	色調(外/内)	
鉢1	20	口縁部まで1/2残存	○	20.7	(14.3)	10.5	粗砂(砂礫多)	淡青灰/灰色	
鉢2	21	胴部以下残存	○		15.6		粗砂(砂礫多)	淡青灰褐/灰褐色	
鉢3	22	鉢小破片と平瓦片2点	×				細砂	暗褐色/灰色	
鉢4	23	鉢小破片と平瓦片多数	×				粗砂(砂礫多)	暗青灰色	土師質坏小片伴う
鉢5	24	底部残存	○	(17.3)	13.5	11.1	粗砂(砂礫多)	褐色	
鉢6	25	底部の一部が残存	△		(11.8)		粗砂(砂粒多)	濃褐色	
鉢7	28	口縁部以下割れて残存	○	24.3	13.6	12.0	粗砂(砂粒多)	赤茶褐色	
鉢8	26	破片数点	×	23.4			粗砂	濃褐色	
鉢9	27	破片数点	×	(18.4)			粗砂(砂礫多)	赤褐色	
鉢10	29	釜21に口縁破片混在	×	(26.8)			粗砂(砂礫多)	濃褐色	

4. 羽釜

番号	遺物番号	遺構・遺存状態	原位置	遺物の特徴					備考
				口径	胴最大径	器高	胎土	色調(外/内)	
釜1	30	肩部まで1/2残存	○	13.2	29.1	18.5	細砂	淡灰褐色	
釜2		粉々に割れて出土	△				粗砂(砂粒多)	茶褐色	
釜3	31	肩部以下残存	○	15.8	34.5	19.8	粗砂(砂粒多)	黒色	13cm角の平瓦片在中
釜4	32	ほぼ完形	○	13.3	30.4	19.6	粗砂(砂粒多)	濃青灰褐色	
釜5	33	鍔部以下残存	○	13.3	32.4		粗砂(砂礫多)	灰色/濃青灰色	
釜6		割れて出土	△				粗砂(砂粒多)	茶褐色	長方形の平瓦出土
釜7	34	鍔部以下残存	○	14.0	31.3	20.5	粗砂(砂礫多)	灰白/青黒~灰色	
釜8	35	肩部以下残存	○	14.8	31.3	20.2	粗砂(砂礫多)	淡褐色	
釜9		破片数点	×				粗砂(砂粒多)	暗褐色	
釜10		破片1/4個体分残存	△		(32.3)		粗砂(砂粒多)	灰白~灰黑色	
釜11		破片数点	×				粗砂(砂粒多)	暗灰色	
釜12	36	鍔部以下残存	○		32.5		粗砂	灰色	結晶質石灰岩細片在中
釜13		破片多数が集中	×				細砂	淡青灰色	
釜14	37	肩部以下残存	○	(14.7)	30.7	20.4	粗砂(砂礫多)	茶褐色	
釜15		破片が集中	×				粗砂(砂粒多)	淡赤褐色	
釜16		破片が集中	×				細砂	淡青灰褐色	
釜17		破片数点	×				粗砂(砂粒多)	暗褐色	
釜18		破片数点	×				粗砂	淡暗灰褐色	
釜19	38	肩部以下傾いて出土	○	13.0	30.8	20.4	粗砂(砂粒多)	淡黒灰色	空風輪中から出土
釜20	39	鍔部以下残存	○	15.6	31.2		粗砂(砂礫多)	青褐色	
釜21	40	鍔部以下1/2残存	○	14.4	32.2		粗砂(白色粒多)	暗灰褐~灰色	
釜22		胴~底部破片4点	△				粗砂	黑灰褐色	
釜23	41	鍔部以下1/2残存	○		31.0		粗砂(砂粒多)	暗青灰色	

第3節 土器棺墓

火葬藏骨器をすべて取り上げた後、調査区南半において土器棺墓3基が検出された。土器棺には「亀山系土器」と呼ばれる瓦質土器の大甕が使用されており、火葬藏骨器群よりも時期が下るものと思われる。棺の中からは若干の副葬品が出土したが、人骨は全く残存していなかった。

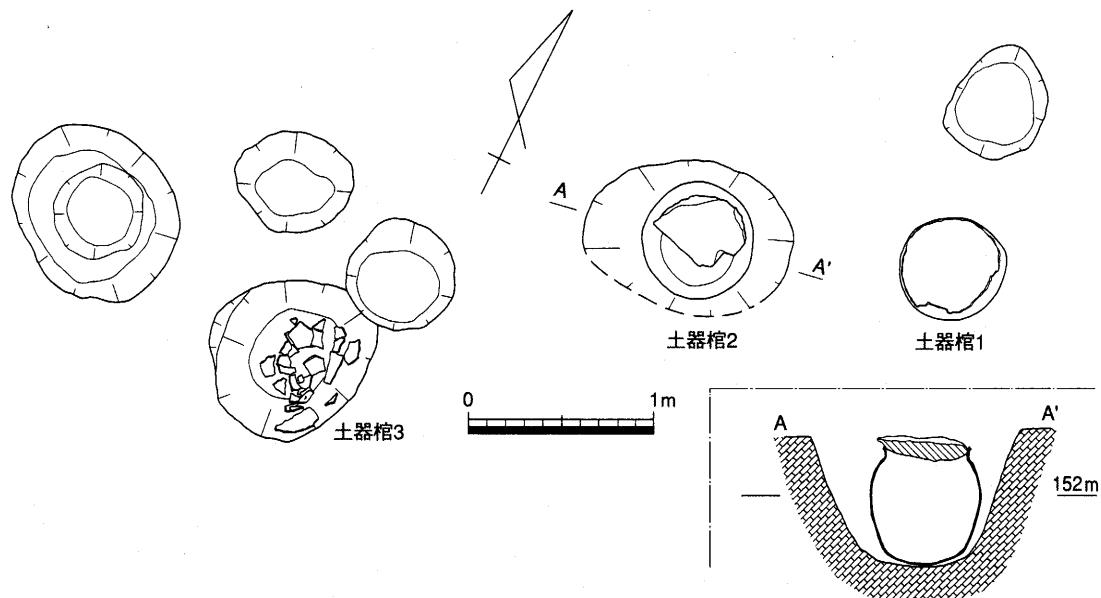
土器棺3の西側約50cmで検出された深さ約40cmの土壙では、その内部でさらに直径約50cm、深さ約20cmの円形の窪みが確認された。窪みの形状から、盗掘により抜き取られた大甕の底部痕跡であると思われる。また、この他にもいくらか土壙が確認できるが、いずれも深さ20cm程度のひとまわり小さい穴であり、その性格は不明である。

土器棺1

大甕の下半部が原位置を保って出土した。体部上半は地表に露出したためか、肩部の一部を除いて大部分が失われていたが、口縁部の一部が中に落ち込んでいた。甕の中から銅錢13枚が出土した。

47は復元口径46.8cm、底径36.6cmである。口縁端部は若干上下に拡張し、ごく浅い凹線状の窪みが2条施されている。体部外面は縦ハケメの後に粗大な格子タタキが施され、内面は粗いハケメ調整で仕上げられている。底部外面は、格子タタキの後さらに粗いハケメ調整。色調は淡黒褐色から淡茶褐色を呈し、比較的堅硬な焼き上がりである。

銅錢(50～55)は、13枚のうち7枚が紐を通した状態のままで出土したことから考えて、もとは1まとめに紐に通された状態で納められていたものと思われる。紐を抜いて7枚錢を分離したが、鎔化が進行しており文字は判読できなかった。



第11図 土器棺墓群 (1/40)

土器棺2

土器棺1の西側約70cmの位置に検出した。蓋石が地山よりも低い位置になるほど深い土壌に埋納されていたため、完全な状態で遺存していた。土壌の平面形は橢円形を呈しており、長径約110cm、深さ約70cmである。蓋石は平面形が約50cm×40cmの長方形で偏平な石を使用している。蓋石には透き間があったものの、甕内部への流入土はほとんど見られなかった。甕の底部内面には、青白色を呈する粘土がこびりついており、そこから銅銭54枚と、鉄製品2点が出土した。

48は口径45.8cm、胴部最大径59.2cm、器高63.4cm、底径40.4cm。口縁端部は上方への拡張が顕著である。口縁部内面には、焼成前に「×」形の記号が15cmの間隔をあけて2カ所に刻まれている。体部外面はやや粗い縦ハケメの後、ナデで調整を行い、その後で粗い縦ハケメを杜撰に施す。内面は粗いハケメ調整。底部外面には粗大な格子タタキを施す。底部は一部の破片が細片となって失われたためか、完全には復元できなかった。色調は淡褐色で、比較的堅硬な焼き上がりである。

銅銭(56～61)は、54枚のうち44枚が紐を通した状態のままで出土したことから、やはり1まとめの差し銭の状態で納められていたものと思われる。44枚の銭塊には布の付着が見られることから、袋もしくは布に包んで埋納したことが予想される。鉄製品62と63は刃物のようであるが、鋸化が著しく全体の形状がつかみにくい。62は全体に木質痕が付着しているが、63には木質はない。

土器棺3

土器棺2の南西約160cmの位置に検出した。深さ約50cmの土壌の中には、粉々に割られた口縁部・胴部・底部の破片が角礫とともに散在していたことから、一度掘り出された大甕が、割れた後で放棄されたものと考えられる。甕の破片に混じって、銅銭17枚と硯1点が出土した。

49は復元口径47.0cm、復元底径36.2cm。口縁端部は上方に拡張され、口縁部内面には焼成前に「×」形の記号が刻まれている。この記号は3カ所以上施されたことが確認できるが、等間隔で刻まれたものかどうかは不明である。体部外面は粗い縦ハケメの後ナデ調整、内面は粗い横ハケメ調整。底部外面には粗大な格子タタキを施す。色調は外面が暗茶褐色で内面が赤茶褐色。比較的堅硬である。

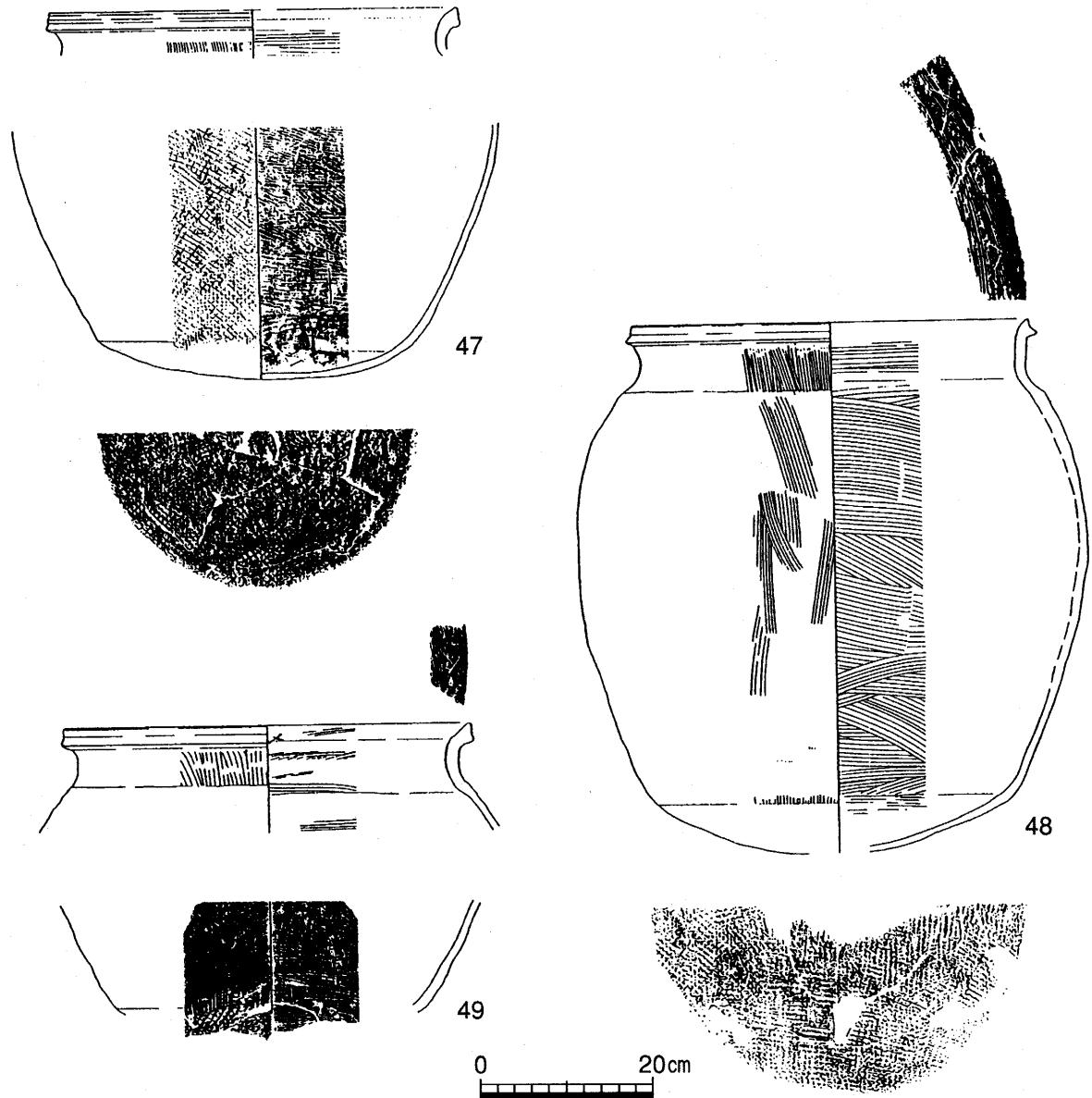
銅銭(64～78)は、17枚すべてが密着した銭塊の状態で出土した。銭に通していた紐は失われていたものの、やはり差し銭の状態で納められていたものと思われる。79は短冊形の長方形硯である。石材は凝灰岩を使用している。全体が丁寧に磨かれており、角になる部分は、ごくわずかに削って角を落としている。長径7.55cm、短径2.65cm、厚さ6mmと小形であり、携帯用の硯と考えられる。

土器棺として使用されていた大甕は、岡山県内では、鴨方町沖の店遺跡2区溝・4区包含層や、倉敷市亀山遺跡の土器溜り9上面などに類例がみとめられる。伊藤晃によって亀山系土器群とされ、室町時代後半(15世紀後半～16世紀全般)の年代が与えられているものである。当遺跡の出土例では、甕の中から出土した銭貨は、確認した限りすべて渡来銭であり、寛永通寶は1枚も含まれていないことから、17世紀前葉以前の年代が与えられよう。

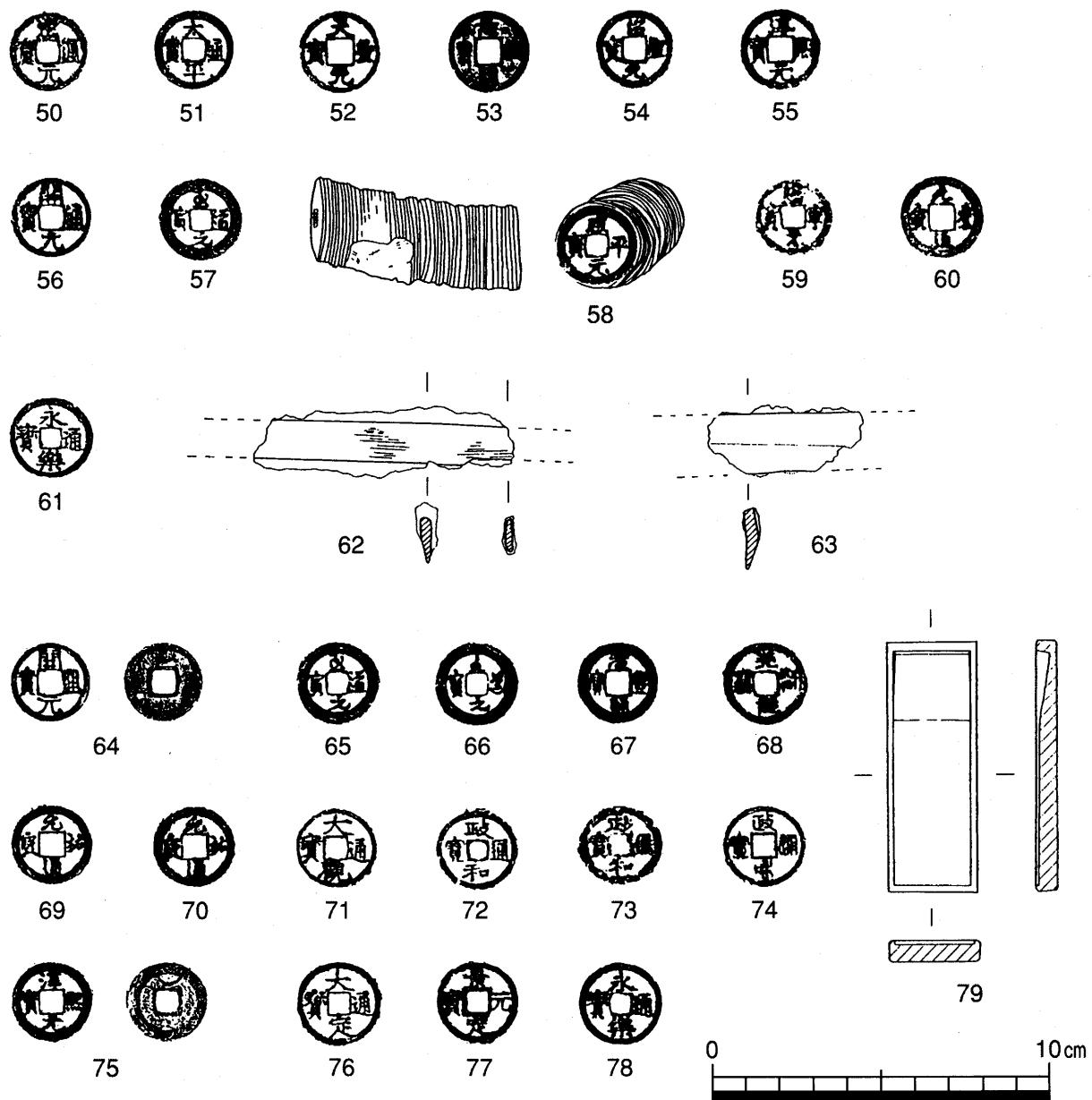
参考文献

伊藤晃「第11章窯業第2節中世窯業生産」近藤義郎編『岡山県の考古学』 1987年

伊藤晃・浅倉秀昭・江見正己「山陽自動車道建設に伴う発掘調査2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981年
岡田博「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年



第12図 遺物実測図(土器館)(1/8)



第13図 遺物実測図(副葬品)(1/2)

土器棺1(13枚)

錢名	国名	初鑄年	備考
開元通寶	唐	621	
太平通寶	北宋	976	
天聖元寶	北宋	1023	
元祐通寶	北宋	1086	
紹聖元寶	北宋	1094	
淳熙元寶	南宋	1174	
紹□元寶			
判読不能		6枚	

土器棺2(54枚)

錢名	国名	初鑄年	備考
開元通寶	唐	621	
至道元寶	北宋	995	
咸平元寶	北宋	998	他43枚
熙寧元寶	北宋	1068	
元豐通寶	北宋	1078	
永樂通寶	明	1408	
□□通寶			
判読不能		4枚	

土器棺3(17枚)

錢名	国名	初鑄年	備考
開元通寶	唐	621	背土月
至道元寶	北宋	995	
至道元寶	北宋	995	
元豐通寶?	北宋	1078	
元□通寶	北宋	1078~98	(豊・祐・符)
元祐通寶	北宋	1086	
元祐通寶	北宋	1086	
大觀通寶	北宋	1107	
政和通寶	北宋	1111	
政和通寶	北宋	1111	
政和通寶	北宋	1111	
淳熙元寶	南宋	1174	背月星
大定通寶	金	1178	
景定元寶	南宋	1260	
永樂通寶	明	1408	
永樂通寶	明	1408	
判読不能		1枚	

表2 土器棺内出土錢貨一覧

第4節 五輪塔

調査区内からは、五輪塔が散乱した状態で出土した。空風輪の数によって、小形の五輪塔が最低9基は墓地内に造立されていたことがわかる。五輪塔はいずれも同程度の大きさのものである。

その分布は、おおむね調査区北端の甕1周辺(80～83・91・93・98・100)、調査区南端の道状平坦部付近(88～90・92・94)、そして中央頂上付近(95・97・99)の3カ所に集中している。調査区端部出土のものは、上方から転落したものであろう。また、空風輪84・85・87はそれぞれ蔵骨器内部に落ち込んでいたものであり、86と96は採集品である。

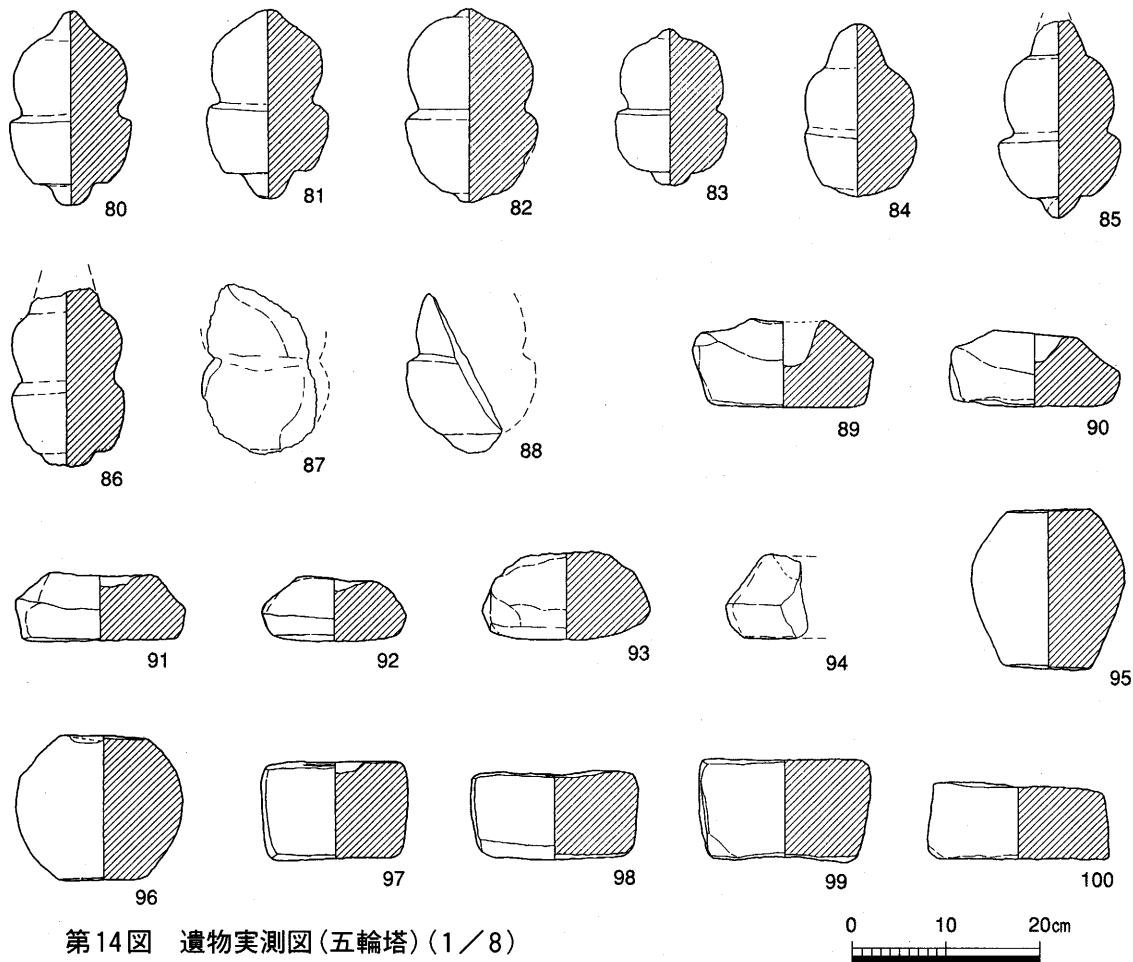
出土した五輪塔はすべて図示している。空風輪9個体、火輪6個体、水輪2個体、地輪4個体である。石材は、花崗岩の83、角礫凝灰岩の87を除けば、すべて結晶質石灰岩である。

空風輪は2種類あり、空風の境界が比較的明瞭で、空輪が球形の宝珠を呈するもの(80～83)と、空風の境界が比較的不明瞭で、空輪上部の突出が大きいもの(84～86)とがある。

火輪も2種類あり、軒の反りが大きく下面が平坦なもの(89～91)と、軒の反りがほとんどなく、下面を含めて全体に丸い形態のもの(92・93)とがある。

水輪は、最大径が中央よりやや上にある。

地輪は、上面に円形の差し込み部を有するもの(97)もある。下面是やや雑に整形しているため、凹凸が激しい。



第14図 遺物実測図(五輪塔)(1/8)

第4章 まとめ

1. 御尊堂遺跡の性格について

御尊堂中世墓地は、標高152m程度の丘陵頂部にある、やや平坦な土地を利用して営まれている。この場所は特に小高い小丘陵の上であり、周囲への眺望が優れている。

御尊堂遺跡が墓地として営まれ始めたのは、鎌倉時代後半頃であると思われる。そして、それから鎌倉末～南北朝頃、すなわち14世紀代にかけて、備前焼の壺と亀山焼の甕を蔵骨器として使用した数基の墓が造営されている。

15世紀以降の室町期になると、備前焼、亀山焼に加えて土師質～瓦質の鉢と羽釜が蔵骨器として使用されるようになる。前段階にはわずか数基の墓が営まれただけであるのに対して、15世紀から16世紀にかけては、実に50基近くの墓が造られている。しかも、鉢や羽釜といった日常の生活用具を転用した蔵骨器が大部分を占めているのである。これは、当初、この地域の有力な在地武士層の一統墓として造営され始めた御尊堂が、しだいに被葬者層が拡大したことに伴って、より共同墓地としての性格を強めていったことを表しているのではないだろうか。ただしこの場合、被葬者はあくまでも武士階級と考えるべきであろう。こうして御尊堂は、有力武士層の一統墓から地侍衆の共同墓地へと変化していったことが推察されるのである。また、当地にあったという伝承の残る西光寺は、中世墓地に隣接する墓寺としての性格を合わせ持っていたことも想起される。

そして蔵骨器の使用は16世紀代まで続いたと思われるが、ある時点で亀山系瓦質土器の大甕による土器棺墓へと変化していく。これら土器棺墓の年代は、16世紀～17世紀前葉に比定される。そして、土器棺墓数基が営まれた後、御尊堂における造墓活動は断絶している。御尊堂中世墓地の廃絶については、直接には政治的・社会的要因によるものと考えられる。ここ御尊堂遺跡は伝西光寺跡の一部であり、西光寺が江戸時代前半に下稻木へと転出したとする伝承があるが、そうだとしても墓地の廃絶とはやや時期が合わない。

2. 伝西光寺跡について

西光寺は、真言宗の寺院で、現在は井原市の下稻木町にある。しかし、この寺はかつて笠岡市入田と井原市上稻木にまたがる丘陵周辺にあったという伝承が地元に伝わっている。これが伝西光寺跡である。伝西光寺跡の周辺は、現在でも西光寺の檀家となっている。

西光寺移転の時期について記した文献は少ない。江戸時代末期の『備中誌』において、

「摩尼山西光寺 本寺嵯峨大覚寺末也 本堂 客殿 庫裏 門

此寺昔は西光坊とて向ふの山に在て六坊の内也といふ 享保年中今の地に移すといふ」とある。

『小田郡誌』下巻では、

「西光寺 下稻木 古義真言宗 本山高野山金剛峯寺 元禄十三年の再建 檀家五百軒」などとし、同上巻では「元禄十二年 上稻木より移転」と記述している。

享保年中(1716～35年)あるいは元禄12年(1699年)の記述から、西光寺が当地から下稻木へと移転した時期は、17世紀末から18世紀前葉頃の江戸時代前半期としておきたい。地元では、この移転は、大火により焼失したことが原因であるとも伝えられているが、真偽のほどは定かではない。

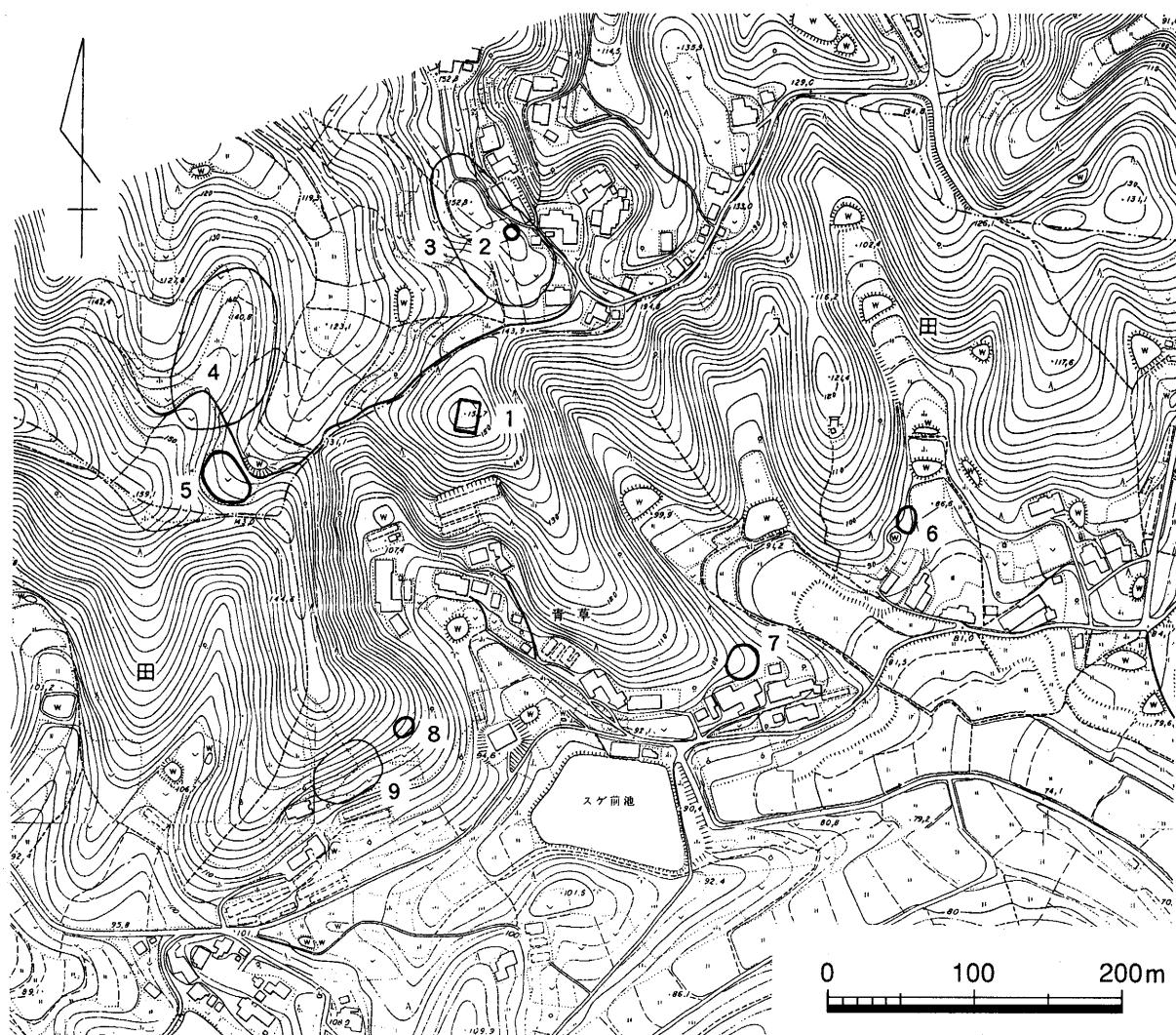
次に、現在確認できる伝西光寺跡の遺構を概観したい。

南側山麓(入田側)には、建物跡といわれる場所が4カ所存在し、それぞれ稲木坊、菅坊、東光坊、横屋坊と呼ばれている。稲木坊と菅坊には、山麓の斜面を切って造られた若干の平坦面が残っている。菅坊は御尊堂の南側登り口にある。東光坊は山の中腹にあるが、そこには現在観音堂などが祀られていて、参拝者も訪れている。横屋坊は、東光坊と同じ山の山麓付近にあったらしい。なお、これらの坊は、スゲ・東光坊・横屋という字名を今に残している。

丘陵北側(上稻木側)には、中坊という名のついた丘があり、現在畠として使用されている。また、斜面を切って造った平坦地があり、やはり畠として使用されているが、ここは寺屋敷と呼ばれており、建物の跡といわれている。かつてその畠の入り口付近に井戸があったともいう。

御尊堂の北西側、現在小集落がある丘陵上のやや平坦な部分にはクヌギの巨木が立っており、荒神様と、御尊堂遺跡とほぼ同時代の五輪塔・宝筐印塔の部品が祀られている。また、この山を総称して堂山ともいう。その他にも、ヤナン坊とか山林坊と呼ばれている山がある。

これ以外にも、北側(下稻木側)のふもとへと下りる道中に建物があり、そこには西光寺にゆかりのある尼僧が住んでいたことを直接記憶している古老がいるが、現在では建物もなくなり、場所もはっきりとわからない。



1. 御尊堂遺跡調査区 2. 荒神様と五輪塔 3. 堂山 4. 中坊 5. 寺屋敷 6. 稲木坊 7. 菅坊 8. 東光坊 9. 横屋坊推定地

第15図 伝西光寺跡周辺図(1/5,000)

報告書抄録

ふりがな	みそんどういせき							
書名	御尊堂遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	4							
編著者名	安東康宏							
編集機関	笠岡市教育委員会							
所在地	〒714-8601 笠岡市笠岡1866番地の1 ☎0865-69-2155							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御尊堂遺跡	岡山県 笠岡市 入田	33 205		34° 32' 34"	133° 28' 25"	19960610 ~ 19960724	300	携帯・自動車電話 基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御尊堂遺跡	中世墓	中世	火葬藏骨器 土器棺墓	備前焼・亀山焼 土師質～瓦質土器 渡来銭・硯・鉄製品 五輪塔				

1. 御尊堂遠景
(西側中坊から)



2. 調査区西半
(南から)



3. 調査区東半
(南西から)



図版 2



1. 釜7、釜5、
釜6、鉢1
釜4、釜3
出土状況
(北東から)



2. 壺1、甕3、
釜2、甕2
釜1
出土状況
(西から)



3. 甕4、甕5
釜8、釜9
鉢2、釜12
出土状況
(南から)



1. 壺 2 の石囲い（西から）



2. 壺 3 出土状況（東から）



3. 壺 7 出土状況（西から）



4. 壺 13 出土状況（南東から）



5. 壺 14 出土状況（南から）



6. 釜 4 出土状況（北東から）

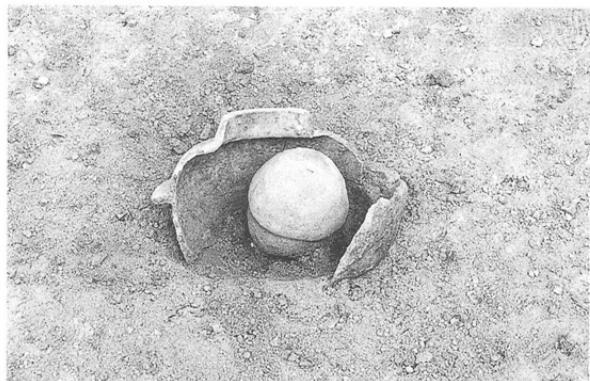


7. 釜 7、釜 5 出土状況（北東から）



8. 釜 14 出土状況（西から）

図版 4



1. 釜19出土状況（東から）



2. 釜20、釜7出土状況（南東から）



3. 鉢4の平瓦出土状況（南西から）



4. 調査区北端部五輪塔出土状況（西から）



5. 土器棺墓群（南西から）



6. 土器棺1出土状況（西から）



7. 土器棺2出土状況（南から）

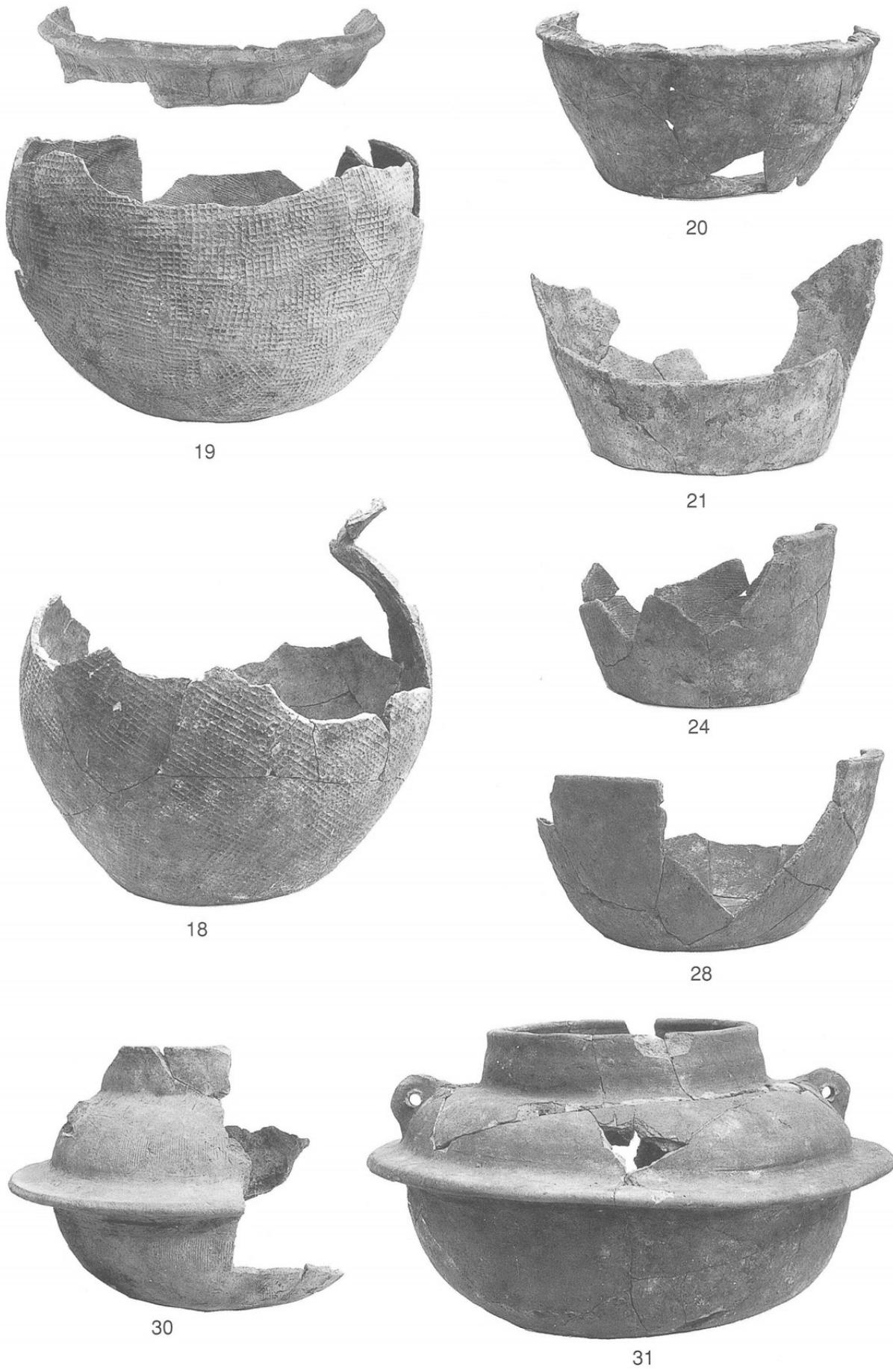


8. 土器棺3出土状況（西から）

図版5 藏骨器①



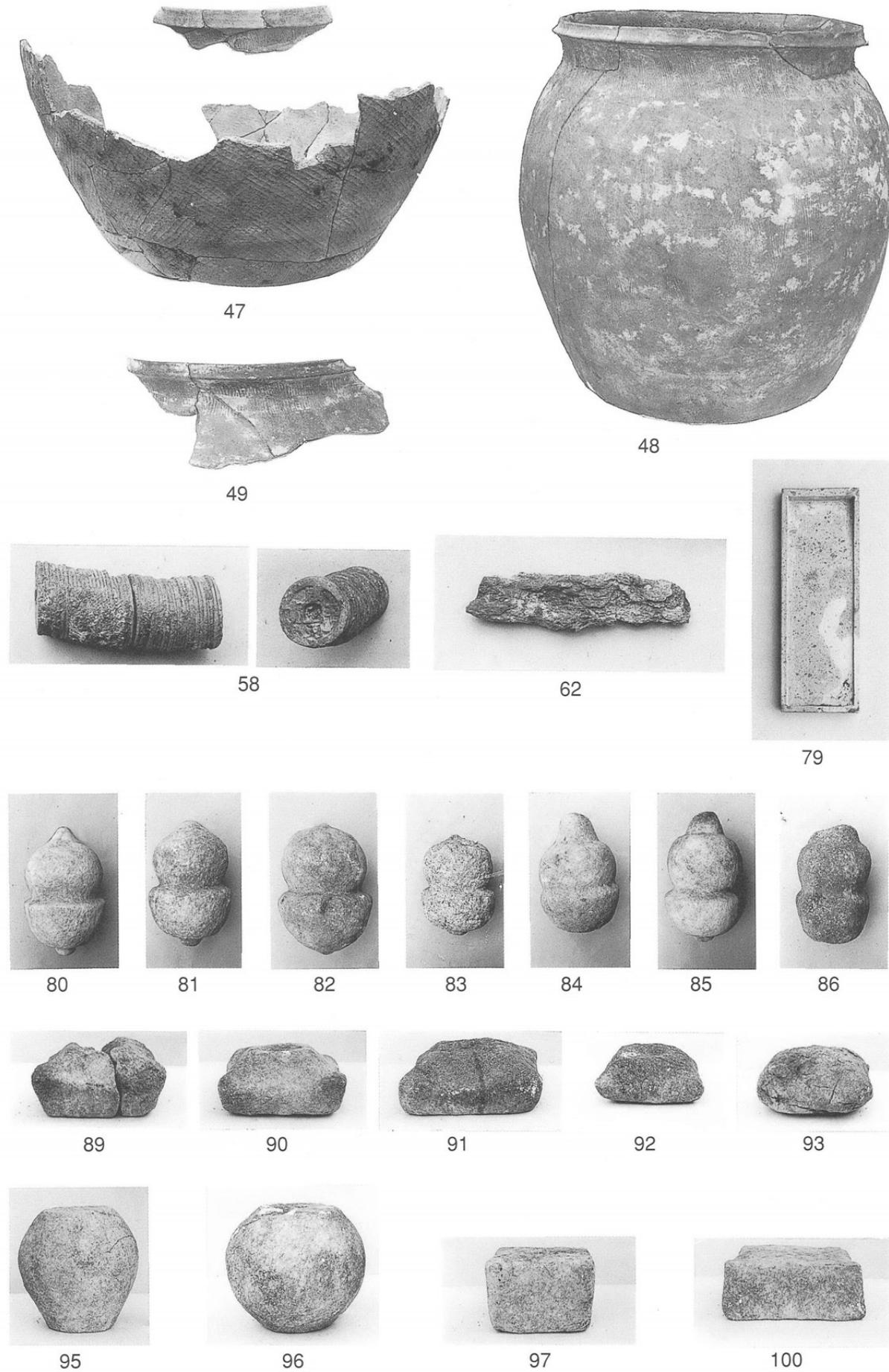
図版6 蔵骨器②



図版 7 藏骨器③



図版8 土器棺墓・五輪塔



笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 4

御尊堂遺跡

平成11年3月25日印刷

平成11年3月31日発行

発行 笠岡市教育委員会
笠岡市笠岡1866番地の1

印刷 株式会社国輝堂
笠岡市美の浜6-6

